

報告要旨

報告 1

「希望の宗教は人類教に何を付け加えたのか」

長谷川悦宏（法政大学文学部非常勤講師）

本報告の目的は J・S・ミルのいわゆる「希望の宗教」が、彼の「人類教」に何を付け加えたのかを明らかにすることにある。ミルの宗教思想に関する研究は近年レイダーやセルなどによって注目に値する研究がなされたことにより、俄かに活況を呈して来たように思われる。しかしながら彼らは、『宗教の功利性』において提示された人類教と比較して、『有神論』において示唆された希望の宗教に対して余り高い評価を与えていない。彼らの考えではミルの宗教思想の基本的立場はあくまで前者にこそある。本発表では先ずミルの人類教を彼の同時代人であり、交流もあったコントの人類教と比較することで、長所とともに特にその短所を明らかにすることを試みる。その上で希望の宗教が人類教に欠けていた点を補うものであることを明らかにしたい。報告者はミルの宗教思想における立場が人類教から希望の宗教へと根本的に変化したと考えるものではないが、希望の宗教にはなお独自の価値があるものと考えている。

報告 2

「宗教史観を巡るヒュームとヴォルテール」

杉本隆司（一橋大学大学院博士課程）

ヴォルテールは『哲学辞典』の「宗教」項目で、宗教の多神教起源説を唱えた「ある哲学者」の説を批判し、一神教起源説を唱えている。この「ある哲学者」が誰なのか、これまで多くの推理がなされてきたが、最近の最も有力な説は『宗教の自然史』のヒュームである。本発表ではこれらの著作を通じて、この二人の宗教史観の差異について検討を行う。宗教の起源が一神教なのか、あるいは多神教なのかという問いは、単なる宗教学的関心に留まるものではない。この差異は一八世紀の理神論および自然宗教の議論にとって本質的な考え方の違いから来るものであるという点をあきらかにすることがこの報告の目的である。ヒュームの宗教論はこれまでヒューム哲学全体に内在するかたちで多くの論考が出されてきたが、反対者たちがどのような点で彼の宗教論（特にここでは『自然史』を取り上げる）を批判したのかという外部の視点を導入することで、多くの「矛盾」が指摘される彼の宗教テキストを、その時代の宗教史観という大局的な視点から考察してみることにしたい。